

# はじめに 「つながり」を問う視角

横浜市は、平成22年12月に策定した『中期4か年計画2010～2013』で、多様なつながりの創出により、社会的課題の解決や新しい価値の創造を促し、「安心と活力」を生み出す「つながるしあわせ」という未来図を掲げた。

同じ平成22年には、NHKの特集番組を契機として「無縁社会」という言葉が流行したが、単身世帯や非正規雇用の増加などに伴う「無縁社会」の進行をはじめとして、環境問題、高齢者福祉から経済活性化まで、社会におけるさまざまな課題に対する処方箋として「つながり」「絆」「コミュニティ」というキーワードが挙げられることが多くなっている。平成23年3月には、議員提案による「横浜市地域の絆をめぐり、地域で支え合う社会の構築を促進する条例」が制定された。コミュニティ論に詳しい広井良典・千葉大教授は、「日本社会における根本的な課題は『個人と個人がつながる』ような『都市型のコミュニティ』ないし関係性というものをいかに作って

けるか、という点に集約される」という課題整理をしている(注1)。

しかしわれわれは、作り上げていくべきコミュニティ、関係性の具体的な姿を未だ描き切れておらず、社会全体が明確なビジョンを持っていないまに閉塞感と格闘しているのが現状ではないだろうか。

こうした状況を踏まえ、本号の特集は、主に人と人との「つながり」について、横浜市の実態を参照しながら具体的に論じる中で、今後の取り組みの方向性を見いだしていくことを意図するものである。その際、「つながり」という極めて幅広い概念を総花的に論じるのではなく、近年、つながりの新しい形として論じられることが増えつつある「ゆるやかなつながり」とでも呼ぶべきつながり方に焦点を絞って事例を集め、考察する。これまで横浜市民が積み上げてきたさまざまなコミュニティづくりの取り組みの重要性を前提としつつ、今、横浜で起こっている「つながり」をめぐる動向を、社会の未来

についてイメージを描く手がかりとして見ていくこととしたい。

## 1 「ゆるやかなつながり」とは

本号で扱う「ゆるやかなつながり」という概念は、確立されたものではない。そこで、本号での議論を進めるため、人と人とのつながり方の類型について、あらかじめ表1のような整理を行った。

ここでは「ゆるやかなつながり」を「緊密なつながり」と対比的に規定する。まず、「緊密なつながり」の典型イメージとして地縁型コミュニティやテーマコミュニティに参加することにより生まれるつながりを挙げる。これに対し、「ゆるやかなつながり」のイメージとして、「プロボノ」(注2)のような、組織を前提としないプロジェクト活動や、Facebookなどのソーシャルメディアにより形成されるウェブコミュニティでのつながり方を想定する。

それぞれのつながり方につ

いて、次のような特性が考えられる。

### ① 活動形態

「緊密なつながり」型は基本的に組織を形成して活動する。地縁型コミュニティは組織を立ち上げることが活動の起点となることもある。テーマコミュニティでは組織は後追いになる場合も多いが、活動の継続に伴い組織体として活動するようになる。これに対し、「ゆるやかなつながり」型では、組織形成は必須でなく、特定の目的(単なる情報交換等も含む)を持って個人と個人がつながることで、結果としてまとまった人数からなるネットワーク型の「集団」が形成される。

### ② メンバー構成

「緊密なつながり」型では、構成メンバーが固定的である場合が多いのに対し、「ゆるやかなつながり」型では流動的であり、メンバー構成やメンバー間のつながり方は文字通り「日々」更新される。

表1 人と人とのつながり方の類型 (相対的な比較)

	緊密なつながり		ゆるやかなつながり
典型イメージ	地縁型コミュニティによるつながり(自治会町内会等)	テーマコミュニティによるつながり(テーマ別市民活動団体等)	プロジェクト的活動によるつながり、ウェブコミュニティなど
活動形態	組織を形成	活動の中で組織化	必ずしも組織化しない
メンバー構成	ほぼ固定	中心メンバーは固定	流動的
メンバー特性	居住エリアを共有	関心領域を共有	多様
参加・離脱	ハードル高い	ハードルやや高い	ハードル低い
継続性	高い	やや高い	低～高

執筆  
編集部

### ③メンバー特性

地縁型コミュニティ、テーマコミュニティのメンバーはそれぞれ居住エリアや関心領域という共通項を持つのに対し、「ゆるやかなつながり」型の場合、「そのネットワークに参加したい」という意思以外に全く共通項がない場合も多い。

### ④参加・離脱

「緊密なつながり」型は、参加・離脱に対して、心理的なハードルが高い場合が多いと考えられる。例えば地域活動等へ参加するときに期待することとして、筆頭に来るのが「気軽に参加できること」(57・1%)という調査結果がある(注3)。「ゆるやかなつながり」型では、短期間での離脱も想定されることから、まさに「気軽に」参加することが可能である(注4)。

### ⑤継続性

参加・離脱の特性と連動して、「緊密なつながり」型は継続性が相対的に高い。「ゆるやかなつながり」型は、そもそも継続自体に重きを置いたつながりではない場合もあり、長く継続するものから、短期間で解消されるものまでさまざまである。

## 2 「ゆるやかなつながり」を今、問う意味

「ゆるやかなつながり」を取り上げるねらいは次の通りである。

### (1) 社会的トレンドを受けて

単身世帯や非正規雇用の増加、さらには自治会町内会の組織化率の低下など、血縁・社縁・地縁といった従来の「緊密なつながり」型のコミュニティへの参加は減少傾向にある。

その一方で、例えば自治会町内会において、他都市から転入してきた「新住民」が参加しやすい自治会町内会のあり方を模索しているケースが見られる。また、「プロボノ」機運の高まりや、ソーシヤルメディアの隆盛、見ず知らずの他人と住居をとにもするシェアハウスの流行の兆しなど、21世紀に入り、つながりの新しい形として「ゆるやかなつながり」型の事例が多く見られるようになっており、このトレンドが続いた場合、社会における重要性が増していくことが予想される。

### (2) 社会的孤立への対応策として

「ゆるやかなつながり」がも

たらす多様なつながりが孤立に対するセーフティネットになったり、「ゆるやかなつながり」が年月を重ねるとともに安定的なつながりに移行する場合が想定されるなど、「ゆるやかなつながり」の量の増加・質の向上は、社会的孤立に対する中長期的なスパンでの予防的処方箋となりうる可能性を秘めていると考えられる。

### (3) イノベーションへの有効性

「つながり」づくりが唱えられるのは、社会的孤立の文脈だけではない。現在、環境問題、ビジネス、学術研究など、社会におけるあらゆる領域で課題解決のためにイノベーションの創造が求められているが、イノベーションは要素間の「組合せ」から生まれるため、多様なメンバーが知識や資源を持ち寄りやすい「ゆるやかなつながり」との親和性が高い。

## 3 特集の構成

次ページ以降、「ゆるやかなつながり」を中心に、「つながり」をめぐる記事を掲載する。

《1》から《4》は総論部分に当たる。まず、日本のつながりの特徴などについて、広井良典教授による議論を紹介する(《1》)。次に、社会的課

題は若者と高齢者に集約されることが多いことを踏まえ、若者や高齢者への支援に携わっている方々による座談会を掲載する(《2》)。横浜市の現状に関するデータとしては、平成22年度に実施した「暮らしやすさ調査」から、関連部分を抜粋する(《3》)。さらに野沢慎司・明治学院大教授の寄稿により、つながりを社会的に考察する「ネットワーク論」の成果を共有する(《4》)。

《5》は横浜におけるつながりに関する取り組み事例である。「つながり」づくりにおける先行分野とも言える福祉保健事業をはじめとして、9つの事例を紹介する。

また、以上の論考の間に挿入されたコラムと書評は、つながりづくりの先行事例や新しいつながり方が広がる兆候を示唆するレポートなど、今後の「つながり」のあり方を考察するヒントとして掲載するものである。

(注1)「コミュニティを問いなおす―つながり・都市・日本社会の未来―」ちくま新書、2009年、18ページ

(注2)プロボノとは、現役勤労者層による専門知識・技能を活かしたボランティア活動である。

(注3)横浜市、財団法人地方自治研究機構「少子・高齢化社会における大都市コミュニティの暮らしやすさに関する調査研究」平成23年3月。以下、「新しい知り合いをつくれること」40・9%、「楽しいこと」(39・1%)、「誰かのためになつていふことを実感できること」(36・9%)と続く。

(注4)なお、例に挙げたプロボノは、責任持ってプロジェクトを完了させるためプロジェクト中の途中離脱は基本的に想定されないが、次のプロジェクトへ参加しないことができるという意味での「離脱」はしやすいくみと言える。